（胃腸疾患を来たした者は二二・六％等。）

(3) **脂肪性食品の温度と健康**　寒冷刺戟の際に、脂肪の消化吸収が低く、且つまた遅いSE型（古俣博士）の特質が観察される。WM型としても低下するが、特にSE型の場合は脂肪性食品給与の場合、これらの諸条件が注意されねばならぬものと思われる。

(4) **冷めたい飲食品と食べ合せ**　冷めたい飲食品と食べ合せて胃腸疾患を招いた場合、SE型では植物性、WM型では動物性食品と食べ合せた場合により障害を来しやすい成績であった。

(5) **総括的に**——温度による食品嗜好の適応性の問題は、殆んど未開の領域というも過言ではなく、小坂動態的体質学の導入はここに新たな曙光を見出し得たように思われる。各項を通じて示された体質差は、ここに詳述すべくもないが、これらを等閑視した場合の給食、栄養指導等を考えてみた場合、その「保育」そのものにも吟味を要すべき問題点を含むものと言い得よう。けれどもこのような体質差を超えて、なお興味ある点は食品温度との馴化と、馴化の過程からみた適応性の問題である。母乳という、適温の栄養源から離れて、幼児らがあらゆる食品への馴化を試みるとき、冷熱いずれの領域をより多く指向し、いずれの領域の耐容性を、どのように得ていくか、性差の萠芽はどのように認められるか——更にその過程において、どのような困難——身体障害の経験を辿らねばならなかったか、(1)(2)の成績はこれらの諸問題の解明に、若干の手がかりと示唆とを与えているものと思われる。(3)(4)がより医学的にとり上げられなければならぬ問題とすれば、(1)(2)はより保育学的に追究さるべき問題点と言い得よう。

V　カリキュラムに関する研究

三才児の保育カリキュラム構成に関する一考察

（自由遊びを中心として）

平安女学院短期大学付属幼稚園　本城光子
今井斐侶子

三才児の保育を考える場合、三才児の特徴を充分に理解する事なしに、所謂標準化されたカリキュラムをそのまま採りあげ年長児との混合クラスの中で保育したり、形あるものへとあせり、一方的な指導を考えがちである。

三才児のよりよい保育を考えるならば、まず、幼児の内にあるものを充分に発揮させ、その芽生えを育てる事が第一である。

カリキュラムを立案するに際しては、幼児の実際の発達状態及び、その動向を充分に理解し考慮した上で、構成されなければならない。そのためには、三才児の生活が、まだ、遊びを中心とする未分化な状態である事が、重要な意味をもってくる。即ち、幼稚園生

活における自由遊びの場で、幼児は自発的に活動し、心身の円満な成長発達をとげ得るのである。また、最も自然な条件のもとに置かれる機会である故、幼児の真の姿が発揮され、保育者にとっては、幼児のあらゆる側面を観察し、個人の指導をなし得る場である。三才児保育における自由遊びが以上のような意義をもつと考えるとき、より適切な保育を行なうためには、日々の保育の現場で、自由遊びの時間に幼児の行動を観察記録し、その結果得るところの資料に基づき、カリキュラム構成を考えてゆきたいのである。以上の事から私達は、保育中、自由遊びの時間に子どもの遊びを観察記録した。

調査方法　遊具六〇種類について（室内三七、外遊二三）毎日登園後の自由遊びの時間と、一度集りを持った後の遊び時間に、遊んだ遊具の種類と使用回数、及び遊び方を記録した。観察対象は三才児男女各四名であり、期間は五七年四月から五八年三月までである。

結果及び考察　(1)一年間を通じての遊具の使用頻度をとると男女児とも外遊びが多く好まれている事が解る。ただ女児は男児に比較して、二、三学期には、室内遊びが多いが、これは、季節の関係と「ままごと」「切紙」等の遊びを好む女児の特性を示しているものと思われる。これから外での活動が充分に出来るような条件を満す必要があると考察される。(2)運動量の必要とする度合によって遊具を三種類に分ち、その使用度数をみた。これによれば男女児とも、一年間を通して運動量大の遊びを好んでいる。幼児の心身の発達には、全身的な遊びが必要であり、三才児においても同様である事を意味している。但し三学期には、女児は運動量小の遊具使用が増えている。これは冬期に入って坐ったままでの遊びを好んでいる結果と考えられる。(2)の結果から例えば、ブランコ、ジャングルジム、すべり台などの単純な運動具の使用出来る機会を多く与える必要が考えられる。(3)遊び方をその形態によって分類し、その頻度をみた。遊具玩具を使用しない遊びも含めて、一人遊びか、平行遊びか、協同遊びかの三つに分類した。ここで言う協同遊びは、三才児の社会性の発達から考えれば、むしろ集合的な遊びを意味するが、他の遊びの形態と区別するためにこのことばを使用した。この結果は男女児とも、一学期にはひとり遊びが約五十パーセントもみられるが、三学期には減少し、反対に協同遊びが増加している。また三学期には、運動量の少ない遊びであっても、他人との交渉を密接に持った遊び方が多くなった事は、同じ遊具でもその遊びの内容は非常な変化をきたす事を示している。したがってそのような可能性を含んだ遊具や遊びを準備する必要が考えられる。

以上のような結果から、三才児は、比較的少人数のクラスであり身も小さいため、とかくせまい部屋を与え動きも制限し、安全のみをはかりがちであるが、私たちは、これら考察した事柄を土台として、三才児の保育カリキュラムの構成を考えてゆきたいと思うのである。

（大会発表論文抄録1―2頁）

「社会」保育（幼稚園）と「道徳」指導（小学校）との関連について

佐賀大学　上野辰美

幼稚園教育要領は幼稚園の教育内容が必ず小学校との一貫性を十分に保持して計画されるべきことを要求し、また小学校学習指導要領はその教育内容ないし指導方法における発展性ないし系統性を期待している。この意味で幼稚園の「社会」保育と小学校の「道徳」